

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要12

2002. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要12

2002. 3

徳島市教育委員会

例　　言

- 1 本書は平成10、11、14年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地および史跡において実施した発掘調査、3遺跡3件についての概要報告書である。
- 2 報告の対象となった遺跡名、調査場所、調査期間、調査地については抄録に記載した。
- 3 発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり、本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。
- 4 出土遺物、図面、写真の整理等報告書作成に関する作業において、下記の方々の御協力を得た。記して感謝したい。

佐伯俊裕 高木 淳 市川欣也 倉佐晃次 中野勝美 青木健司
吉田祐子 露口啓子 折野絵美
- 5 本書に収録した遺物および記録類は、すべて徳島市教育委員会社会教育課において収蔵・保管する。
- 6 本書の作成には調査担当者が分担して執筆し、目次にその文責を明らかにした。なお編集は、勝浦康守が行った。



調査位置図（国土地理院発行1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）
I 名東遺跡 II 矢野の古墳 III 穴不動古墳

目 次

例 言

目 次

本文目次

I	名東遺跡（住宅建設工事）	（勝浦康守）	1
II	矢野の古墳（確認調査）	（下田順一）	7
III	穴不動古墳（確認調査）	（下田順一）	13

挿 図 図 版

I	名東遺跡（住宅建設工事）
第1図	調査地位置図
第2図	遺構配置図・堆積土層図
第3図	堅穴住居跡 SB05出土遺物
第4図	堅穴住居跡 SB05出土遺物
第5図	溝 SD01・02(16・17)、Pit13(18)出土遺物

II	矢野の古墳（確認調査）
第1図	調査地位置図
第2図	地形測量図
第3図	調査区位置図・遺構配置図
第4図	第1～5調査区土層図
第5図	石室実測図（徳島県立博物館提供の実測図を一部改変）

III	穴不動古墳（確認調査）
第1図	調査地位置図
第2図	調査区位置図・遺構配置図
第3図	第1・2調査区土層図
第4図	石室実測図（徳島県立博物館提供の実測図を一部改変）

写 真 図 版

I	名東遺跡（住宅建設工事）
図版1上	調査地全景
下	調査地全景
図版2上	堅穴住居跡 SB05
中	堅穴住居跡 SB05
下	溝 SD01・02
図版3	堅穴住居跡 SB05出土遺物
図版4	堅穴住居跡 SB05（10～15）、溝 SD01（16・17）、Pit13(18)出土遺物

II	矢野の古墳（確認調査）
図版1上	古墳遠景
下	第1調査区土層状況・天井石
図版2上	第2調査区土層状況
下	第2調査区周溝
図版3上	第2調査区不明石敷遺構
下	第3調査区周溝
図版4上	第4調査区土層状況
下	第5調査区周溝

III	穴不動古墳（確認調査）
図版1上	穴不動古墳全景
下	穴不動古墳全景
図版2上	第1調査区
下	第1調査区北壁土層状況
図版3上	第2調査区
下	第2調査区北壁土層状況

報告書抄録

ふりがな	とくしましまいぜうぶんかざいはつくつちょうさがいよう
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要
副書名	
卷次	12
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	勝浦康守・下田順一
編集機関	徳島市教育委員会
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 TEL 088-621-5418
発行年月日	西暦 2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ード 市町村	北 緯 度 。'."	東 緯 度 。'."	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
みょう 名 東	とくしまけんとくしま 市 徳島県徳島市 みょうめいとう町	26201	34度 3分 24秒	134度 30分 1秒	19980910～ 19981003	100	住宅工事に 伴う事前 調査
やののこかん 矢野の古墳	とくしまけんとくしま 市 徳島県徳島市 こくふちょう 国府町	36201	34度 3分 24秒	134度 28分 16秒	19990602～ 19990705	30	確認調査
あなふどうこふん 穴不動古墳	とくしまけんとくしま 市 徳島県徳島市 あなふどうこうふん 名東町	36201	34度 3分 19秒	134度 30分 19秒	20011009～ 20011116	15	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名 東	集落跡	弥 生 中 世	竪穴住居跡 溝 ビット	弥生土器・石器 瓦器・土師器	
矢野の古墳	古 墳	古 墳	周溝・墳丘		
穴不動古墳	古 墓	古 墓	墳丘		

I 名東遺跡（住宅建設工事）

1 遺跡の概要

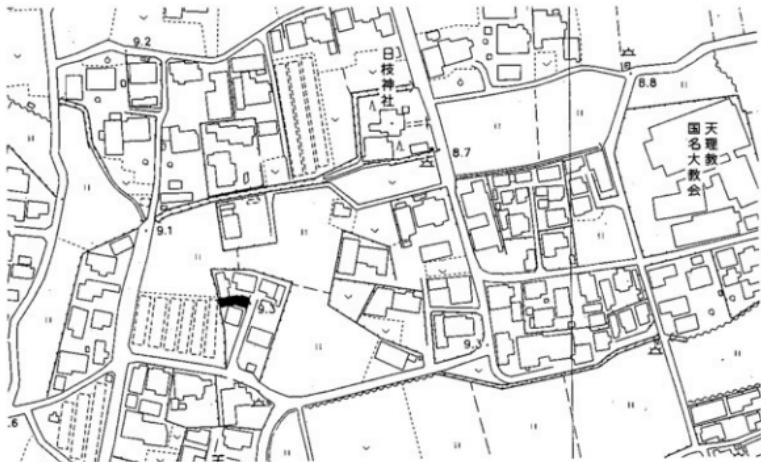
名東遺跡は鮎喰川水系の旧河川が形成した、標高 T.P. + 8 m 前後の南北800m、東西500m を測る冲積微高地に位置する縄文時代晚期から江戸時代に至る集落遺跡である。

弥生集落については、中期末～後期初頭と後期終末の二つの時期を主軸に集落経営がみられる。集落構造については明確ではないが、これまでの調査を踏まえると、数棟の堅穴住居跡を基本単位とするグループが点在する集落構成が想定される。また、堅穴住居跡群に近接して墓制形態としての方形周溝墓が數基存在し、生活と葬送の小空間が生活基本領域となる。鮎喰川旧水系の弥生集落には、中期以降爆発的な発展を遂げる最大規模の南庄遺跡の集落が存在する。名東集落は南庄集落から分派し、中期末以降に比較的短期間の経営が考えられるが、銅鐸保有と朱の精製という地域の特性を持ち合わせており、弥生集落として評価は高い。

名東集落のもう一つの側面に中世集落の姿がある。しかし、その様相については、弥生集落の状況以上に明確でない。平安時代末期『愚昧記』に郡名をとる広域莊園としての記録があり、また『高山寺文書』の安楽寿院領等莊園目案に「阿波國名東」とあることから名東庄は院の御領とされる。広域的な調査が行われることのない地域でもあり、莊園遺跡としての具体的な手がかりはつかめていない。屋敷は掘立柱建物跡数棟により構成され、屋敷墓が普遍的に存在する散村的な農村集落の状況が想定される。

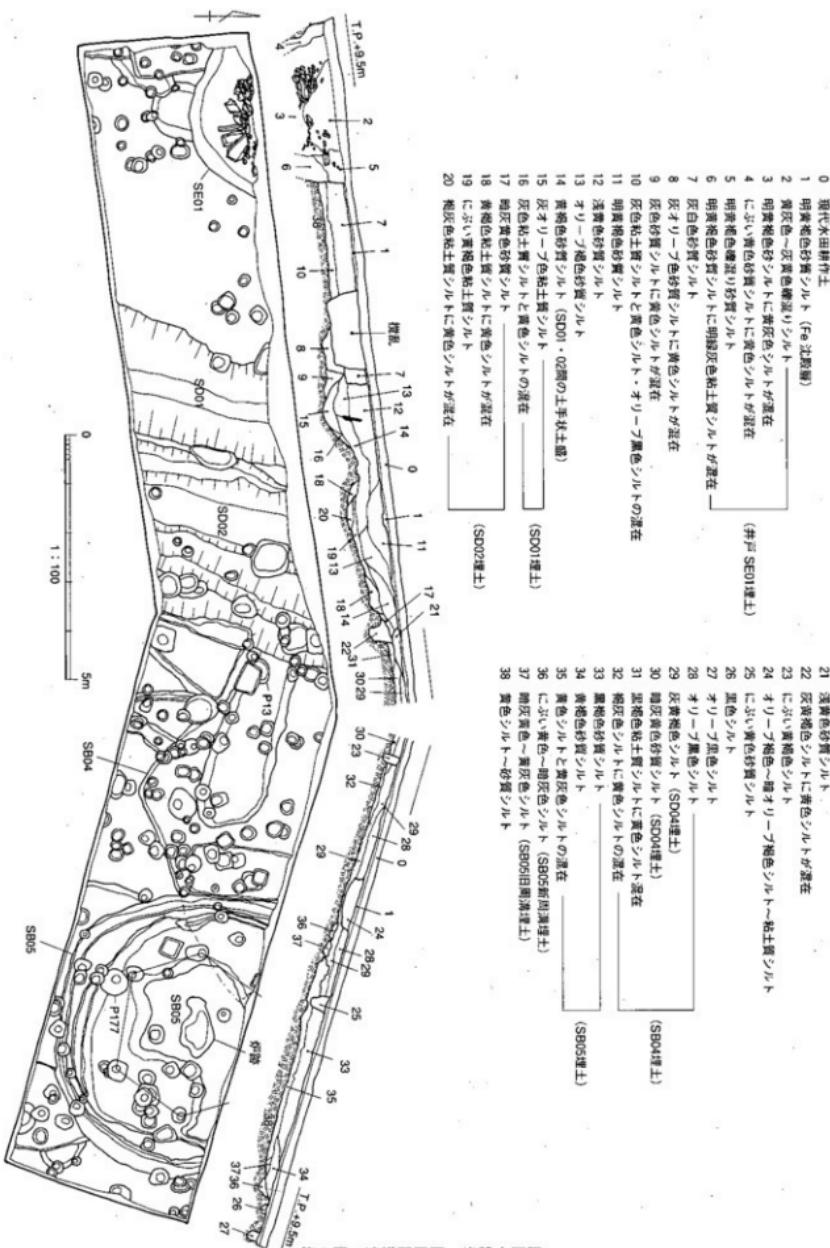
2 調査経緯（第1図）

今回の調査地は、名東遺跡の微高地の南西縁辺部にあたり、南と西側には旧河道が位置する。宅地造成を伴う住宅開発計画に基づき、事前の確認調査を実施、遺跡の存在を明確化させ、進入道路部100m²を対象に調査を実施した。



第1図 調査地位置図

(1:2,500)



第2図 遺構配置図・堆積土層図

3 遺構と遺物

調査地周辺における標高は T.P. +9.2m を測る。現代水田耕作土直下の黄色シルト層上面において、竪穴住居跡、溝、土壤、ピット、井戸を検出している。調査地では包含層の堆積がみられず、土地の削平が行われている。これにより遺構の上部も削平を受けている。

以下、主な遺構と遺物について概略する。

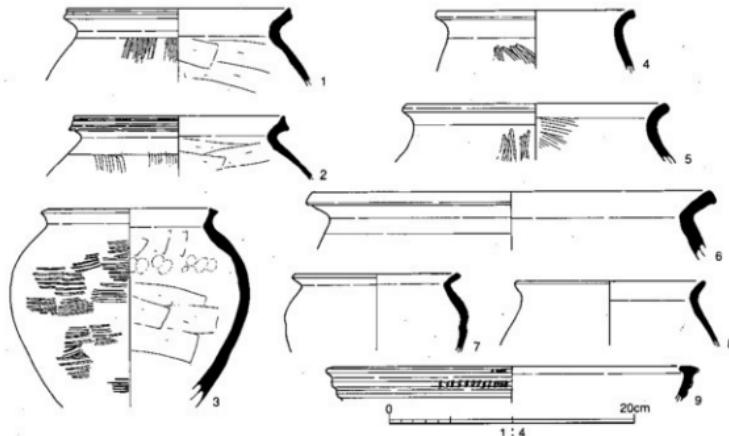
(1) 竪穴住居跡 SB04 (第2図)

推定一辺 5 m の平面形が方形を呈する竪穴住居跡と考えられる。壁高30cmを測り、周溝はみられない。出土遺物には土器細片がみられるが、時期については明確ではない。

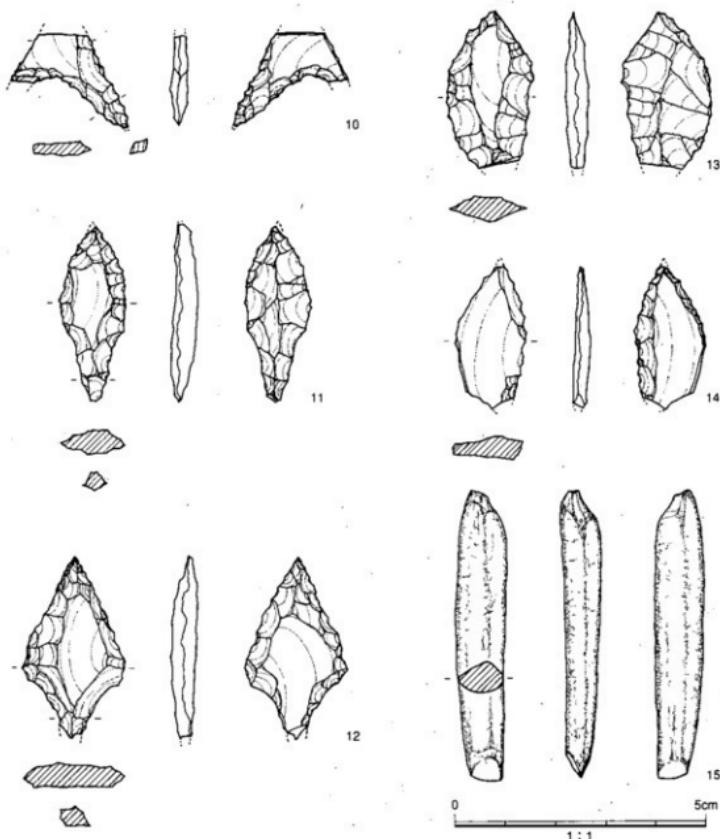
(2) 竪穴住居跡 SB05 (第2・3図)

径 5 m と 7.5 m の円形を呈する二重の溝が巡ることから、拡張住居跡であると考えられる。拡張前の住居跡は径 5 m の円形を呈し、壁高30cmを測る。拡張後は径 7.5 m の方円形を呈するが削平により壁高は不明である。主柱穴は 6箇所と推定され、柱配置は六角形を呈し、拡張に伴う造替はみられない。柱穴は径30~50cmの円形もしくは不整円形を呈し、底部に根石が敷かれる。主柱穴で囲まれた中央部には長径1.2m、短径50cmの不整長円形を呈する炉が設けられる。出土遺物には、壺(1~8)、高坏(9)、石鎌(10~14)、石磬(15)がある。壺1は口縁端部がわずかに上方につまみあげられ、端面は凹面を呈する。2は上方へのつまみあげが明瞭であり、端面には2条凹線がみられる。いずれも体部外面ハケ、体部内面横位ヘラケズリが施される。3は「く」の字状に短く外反する口縁端部の左右をわずかに拡張し、端部上面は凹面を呈する。体部外面横位タタキ、体部内面上位板ナデ+ユビオサエ、下半には横位ヘラケズリが施される。4・5は口縁部が短く外反し、端部断面形は方形を呈し、端面は平坦である。いずれも体部外面にはヘラミガキが施される。6は「く」の字状に屈曲する口縁部の端部が下方にわずかにつまみ出され、端面は平坦である。7・8は短く外反する口縁部で、端面は丸くおさめられる。

高坏9は口縁端部が左右に拡張し、端部上面は平坦である。口縁部外面には凹線文が巡り、刺突文が施される。



第3図 竪穴住居跡 SB05出土遺物



第4図 豊穴住居跡 SB05出土遺物

石器10～14の材質はサヌカイトである。基部の形状は、10は凹基無茎、11、12は凸基有茎、13、14は平基である。いずれも横形剥片を素材とし、先行剥離面および主要剥離面を大きく残す。15は石鏃である。

(3) 溝 SD01・02 (第2・5図)

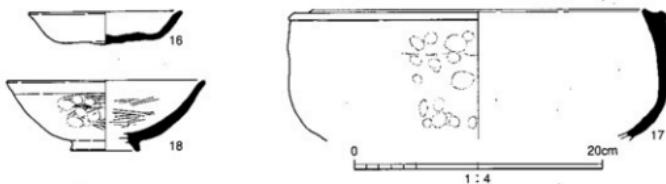
溝 SD01は幅2.5m、深さ1mを測り、断面形は浅い椀状を呈する。SD02は幅1.75m、深さ75cmを測り、断面形は浅い皿状を呈し、南北方向に並走する溝である。当初、SD01、02は土手により区別されていたが、溝内への土砂の堆積が進行する過程において両溝は1条化する。SD01の底部から土師器壺(16)、鍋(17)が出土している。

壺16は底部ヘラ切りの回転台成形による。鍋17は口縁部に形骸化した鉗状の突出をもつ。体部外面にはユビオサエがみられる。

(4) Pit13 (第2・5図)

長径50cm、短径40cmの不整円形を呈するピットである。出土遺物には瓦器椀（18）がある。

瓦器椀18は体部外面はユビオサエ+ヘラミガキ、体部内面にはヘラミガキが施される。器壁には厚みがあることから、畿内産の形態および手法を模倣した在地産瓦器椀であろうか。



第5図 溝SD01・02 (16+17)、Pit13 (18) 出土遺物

4 小 結

調査地は名東遺跡の推定範囲からみれば、微高地上の南西縁辺部に位置する。生活空間の基本構造である竪穴住居跡が2棟以上確認されていることから、竪穴住居数棟を1グループとする1つの単位が存在するものと想定される。

竪穴住居跡SB05出土遺物の壺の口縁部の形状には、端部を上方に明瞭な拡張をみせ、端面に凹線がめぐるタイプはみられず、断面形が方形化し端面は無文化した後期前葉の様相であると考えられる。高坏9は皿状の坏部を呈するものと考えられ、口縁部には凹線がめぐる中期的な様相を残している。壺の形状変化と比較して、高坏の形態変化の鈍さが示される資料であろう。名東遺跡における後期前葉の資料は少なく、弥生中期末と後期終末の二極化した集落經營の間隙を埋めるものである。名東遺跡の弥生集落の様相を再考する事例として貴重である。

溝SD01・02、Pit13の出土遺物は12~15世紀代の様相を示すものであり、前述したように、名東遺跡の遺跡としての性格を如実に示している。

溝SD01・02の2条溝は幅5mを測る規模の大きなものであり、2条溝を界に西位では遺構が希薄になることから、東位に存在が想定される一つの集落を区画する性格の溝であると考えられる。2条溝は15世紀代まで機能し、埋没後、少なくとも16世紀以降には集落が西位にも拡張されたものと考えられる。

II 矢野の古墳（確認調査）

1 調査に至る経緯と経過（第1図）

気延山古墳群の中の一つである「矢野の古墳」は、両袖式の横穴式石室構造の古墳としてよく知られており、1953年（昭和28）に徳島県指定史跡に認定されている。また、墳丘の測量および石室の実測（一部未調査）は、1972年（昭和47）2月29日から3月9日にかけて、徳島県博物館（現在の徳島県立博物館）が実施⁽¹⁾している。

今回ここに報告する発掘調査は、1999年（平成11）阿波史跡公園の園路整備工事に伴うものであり、古墳の範囲確認等の基礎資料を得ることの目的で実施した。

2 調査の概要

まず最初に、周辺地形の測量（第2図）を行った。その後、調査区を設定し、発掘調査を行った。なお、調査にあたっては、必要最低限の伐採を行うこととし、できるだけ全体の景観を損なうことの内容に配慮した。

以下、各調査区ごとに、主な検出遺構と出土遺物について概要を述べる。

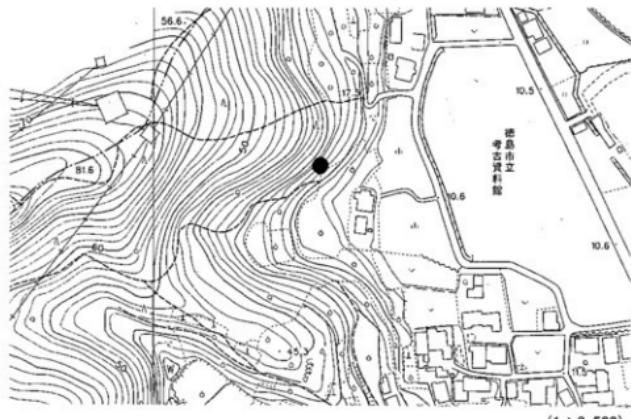
（1）第1調査区（第3・4図、図版1）

調査区の西端は、玄室の天井石まで掘り下げた。墳丘上には全体的に腐植土層が覆っており、その直下に盛土が確認できた。ただし、古墳の東端に関しては、古墳の東側下段を開墾時に削平を受け、明確なものは確認できなかった。ただ、盛土の状況や岩盤の入り方から、削平を受けた下端付近が東端であったことを推定できる。

また、調査区東半分では、岩盤の一部が落ち込み、その間には山石が多量に入り込んでいた。このことから、旧地形では谷間があり、後に埋没したものと考えられる。

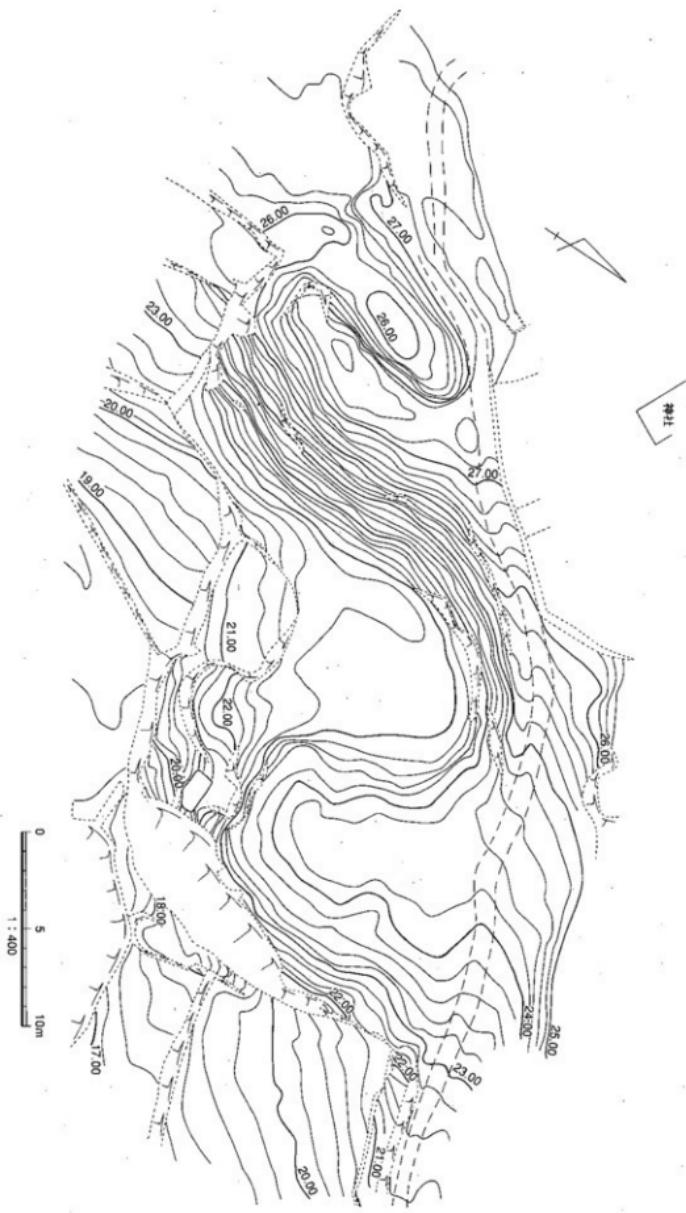
（2）第2調査区（第3・4図、図版2・3）

調査区の南端は、玄室の天井石まで掘り下げた。調査区の南端から3.9～9.5mにかけて石敷の平

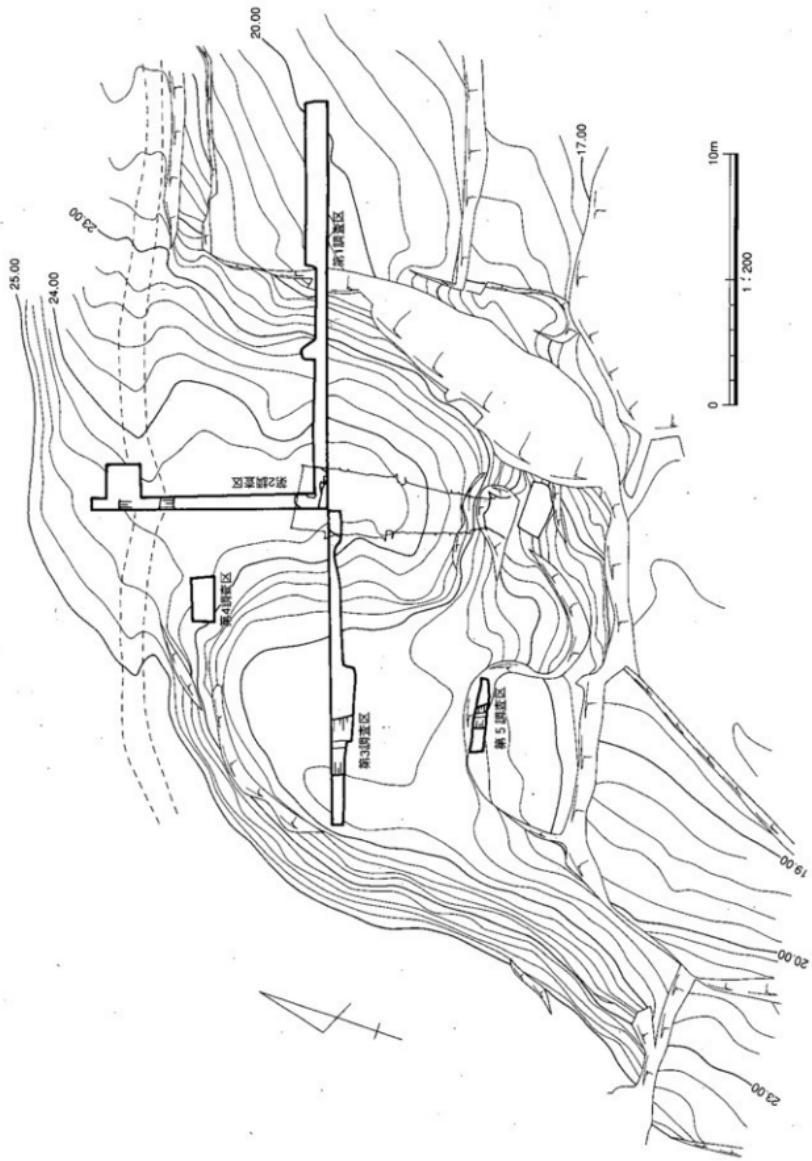


第1図 調査地位置図

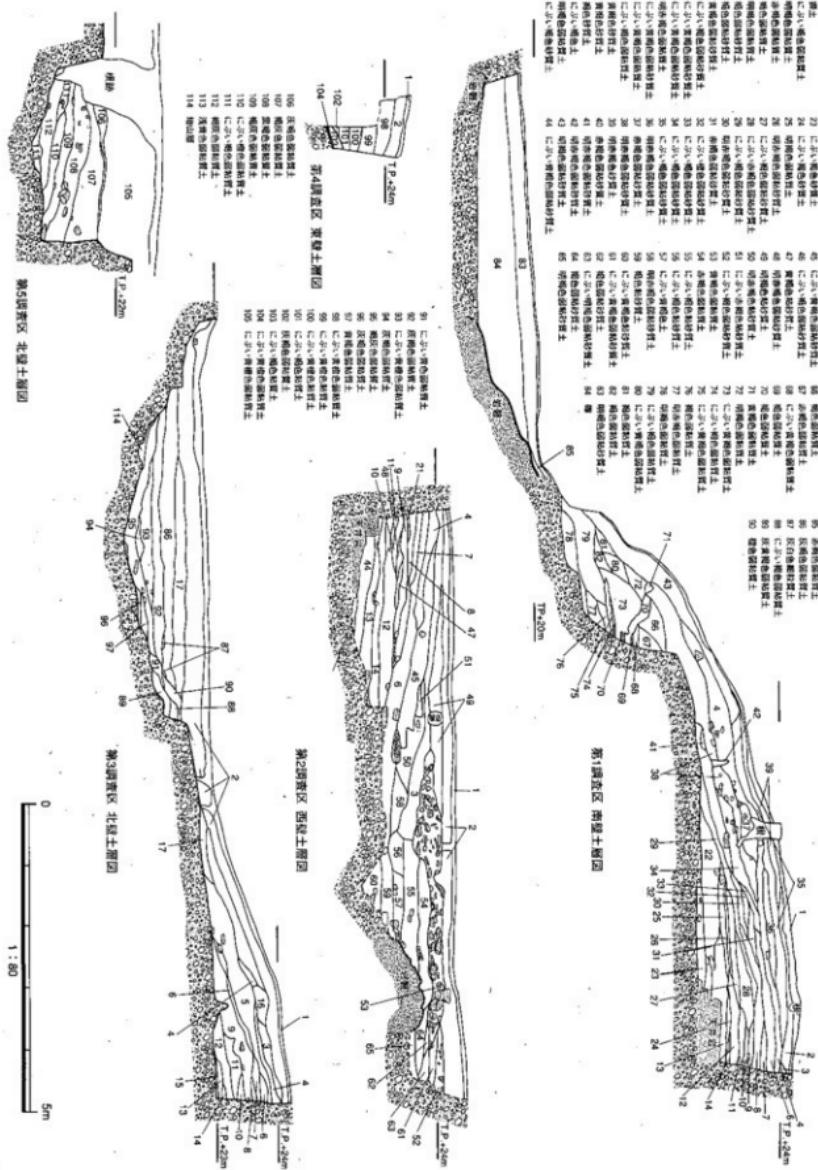
（1:2,500）



第2図 地形測量図



第3図 調査区位置図・造構配置図



第4図 第1~5調査区土層図

坦な面が検出された（図版3）。これについて当初は、古墳造営に伴うものかと考えられたが、断ち割る中で石材の間に瓦の混入もあり、古墳の北端の周溝付近が埋没した後、墳丘の一部を削平しながら、石敷の平坦面を造ったものと考えられる。遺物もなく造られた時代や目的等について、全く不明である。

調査区の南端から5.6mのところから、V字状に岩盤の落ち込みを検出した。この落ち込みが、古墳の北端であり周溝であると考えられる。

(3) 第3調査区（第3・4図、図版3）

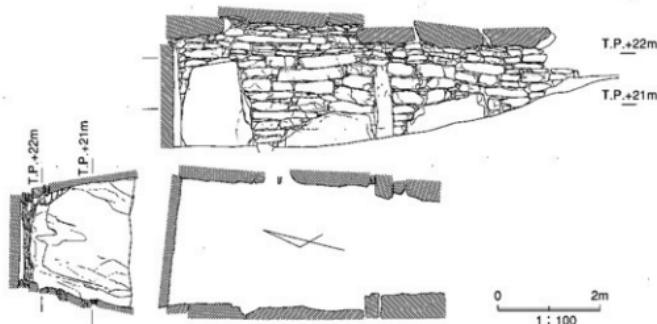
調査区の東端は、玄室の天井石まで掘り下げた。古墳の盛土が、調査区の東端から7m付近まで検出した。また、1mのテラス部と幅約2mの周溝を検出した。この周溝の西端に再び平坦面が検出された。

(4) 第4調査区（第3・4図、図版4）

古墳の墳端を確認するために、第4調査区を設定した。この調査区の西端で、現地表下1.3mで弧を描くように北側に下がる落ち込みを検出した。この落ち込みが墳端の一部であると考えられる。ただし、周溝は確認できなかった。

(5) 第5調査区（第3・4図、図版4）

第1～4調査区より下段の旧畠部において、古墳の墳端の残存状態を確認するために、第5調査区を設定した。調査区の中央付近で、第3調査区で検出したものより幅が狭いが幅1mの周溝を検出し、この東側にテラス部も検出した。また、この西側には平坦面が検出した。ただし、墳端が想定される箇所は結果として崖下となり、調査不可能であり、確認はできなかった。しかし、墳端は遺存していると推定される。



第5図 石室実測図（徳島県立博物館提供の実測図を一部改変）

3 小結

矢野の古墳の築造時期は、石室の規模・構造等から、6世紀末～7世紀初頭と推定されており、石室の開口部を南側にし、古墳を取り囲む尾根など風水思想の影響を受けた選地となっている。³⁰ 今回の発掘調査において、開口部付近の危険性から墓道の確認ができなかった。また、葺石なども確認できなかった。

次に、検出された主な遺構を再掲し、墳形と規模を想定する。

第1調査区では、墳丘、第2調査区では、墳丘と岩盤のV字状の落ち込みと周溝、第3・5の各調査区では、墳丘、周溝、テラス部と平坦部、第4調査区の墳端の一部がある。

これらのことにより、この古墳の径を推定するならば、石室の玄門の中心を古墳の中心とし、直径17.5mの円墳が想定できる。

今回、小規模な調査であったが、ほぼ良好な状態で墳端を検出できることにより、墳形等を復原できた。今後、徳島県下の後期古墳の研究上非常に貴重な資料となる。

(註)

- (1) 徳島県博物館『徳島県博物館紀要 第4集』、1973年。
- (2) 東 潮氏（徳島大学総合科学部教授）より御教示をいただいた。

III 穴不動古墳（確認調査）

1 遺跡の概要と調査に至る経緯（第1図）

徳島市名東町に所在する地蔵院の境内に存在し、以前から埋葬施設が開口しており、出土遺物については不明であるが、巨石を使用した両袖式の横穴式石室をもつ古墳としてよく知られている。墳丘および石室の測量調査については、1971年（昭和46）に徳島県博物館（現在の徳島県立博物館）により実施⁽¹⁾されている経緯がある。

今回、ここに報告する調査は、徳島市の史跡指定に向けた基礎資料を得ることを目的としたものであり、墳丘測量の再実施および範囲確認のトレンチ調査を実施した。なお、平成14年2月25日付で市指定となる。

2 調査の概要

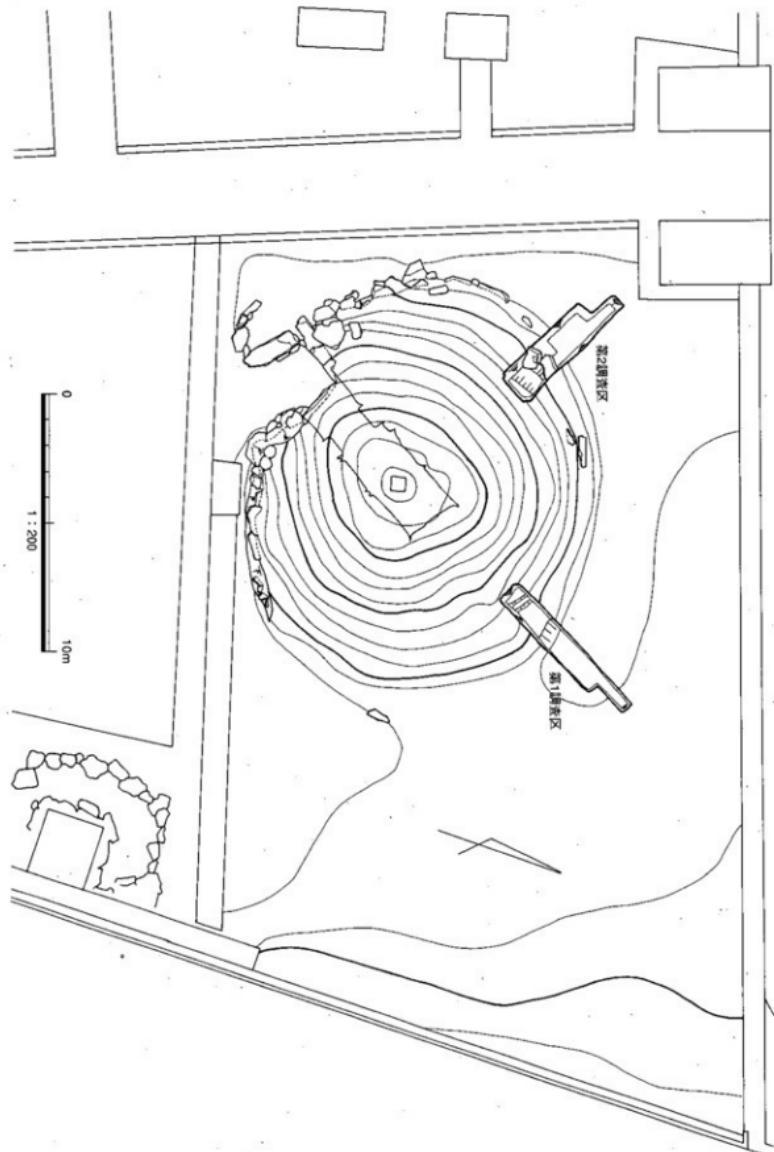
まず最初に、墳丘測量の後、調査区を2カ所設定したトレンチ調査を実施した（第2図）。以下、各調査区ごとに、主な検出構造と出土遺物について概要を述べる。

（1）第1調査区（第2・3図、図版2）

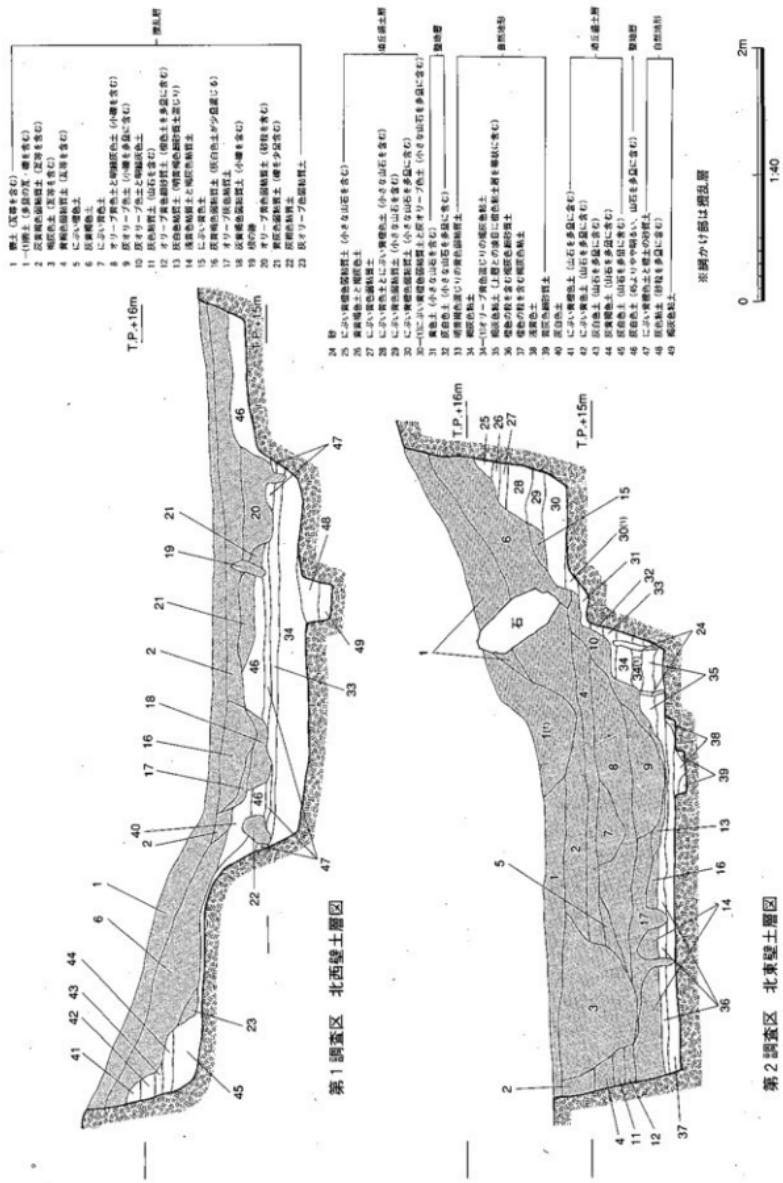
堆積土層の観察から、搅乱（土層No1～23）を受けている部分が多い。古墳造成時の整地層（土層No46）、整地層上に築かれた壇（土層No45）、古墳築造以前の自然地形の地層（土層No33、34、47～49）を確認している。墳丘については、搅乱により削平を大きく受けているが、版築の盛土（土層No41～44）を確認している。土層No40は、墳丘土の崩落土であり、上位の搅乱を受けた層と異なり近世瓦片等を含んでいない。これらのことから、土層No45は、一部に後世の搅乱を受けてはいるものの、壇の端については大きな搅乱を受けていないと判断されることにより、この端部が古墳の墳端と想定される。



第1図 調査地位置図



第2図 調査区位置図・遺構配置図

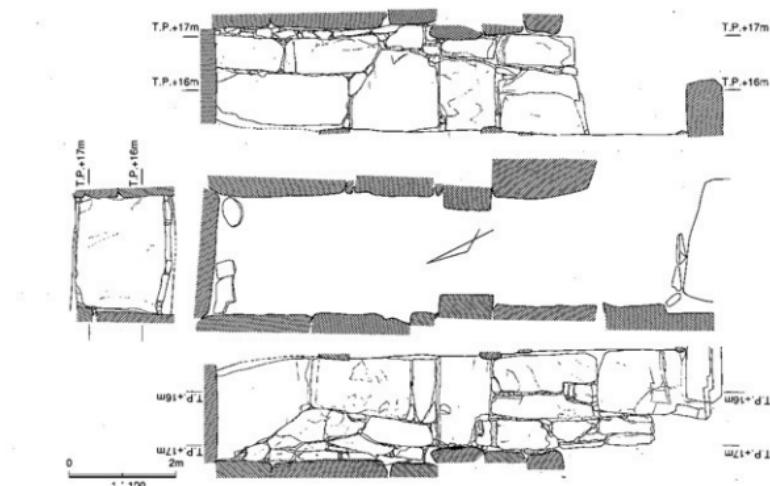


第3図 第1・2調査区土層図

(2) 第2調査区 (第2・3図、図版3)

古墳築造以前の地層まで影響を与える攪乱 (土層No1~16) を受けている部分。第1調査区でも確認された古墳造成時の整地層 (土層No31、32)、この整地層の上に築いた壇 (土層No30、30(1))、さらに、古墳築造以前の自然地形の地層 (土層No33~39) を検出した墳丘については、攪乱により削平を多く受けているが、版築の盛土 (土層No25~29) が見られる。この盛土層直上の攪乱層で、須恵器片1点と土師器片16点が出土している。

墳丘東側に据る石列については、攪乱層内に立てられていることから、後世、古墳の一部平時に、庭石あるいは土止め用に設置されたものと考えられる。



第4図 石室実測図（徳島県立博物館提供の実測図を一部改変）

3 小結

穴不動古墳の築造時期は、石室の規模・構造等から、7世紀第2四半期から第3四半期と推定されており、石室の開口部を南側にし、古墳を取り囲む尾根など風水思想の影響を受けた選地となっている⁽¹⁾。

今回の発掘調査において、葺石などは確認されなかったが、粘土層の広がる自然地形を整地し、壇を築いた後、版築による墳丘を築き古墳を造営したものと考えられ、この古墳の規模・形態は、石室の四隅を結ぶ対角線の中心を古墳の中心とし、直径約18mの円墳とされる。

今回、小規模なトレンチ調査であったが、ほぼ良好な状態の墳端を確認されたことにより、墳丘の規模および形態が明確化され、徳島県下の後期古墳の研究上、貴重な資料となる。

（註）

- (1) 徳島県博物館『徳島県博物館紀要 第4集』、1973年。
- (2) 東 潤氏（徳島大学総合科学部教授）より御教示をいただいた。

写 真 図 版

I 名東遺跡（住宅建設工事）



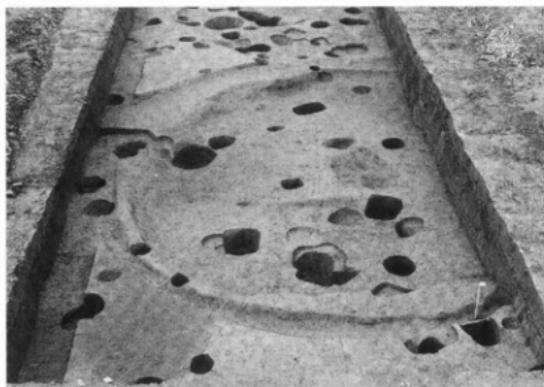
調査地全景
(東から)



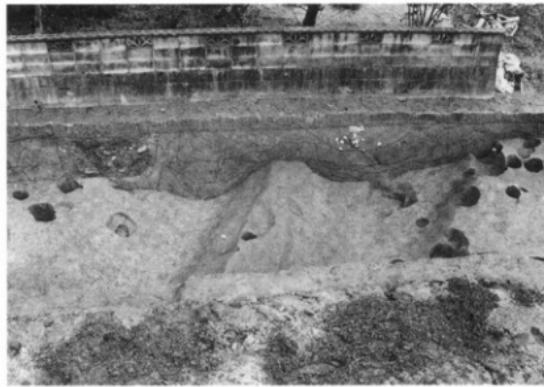
調査地全景
(南西から)



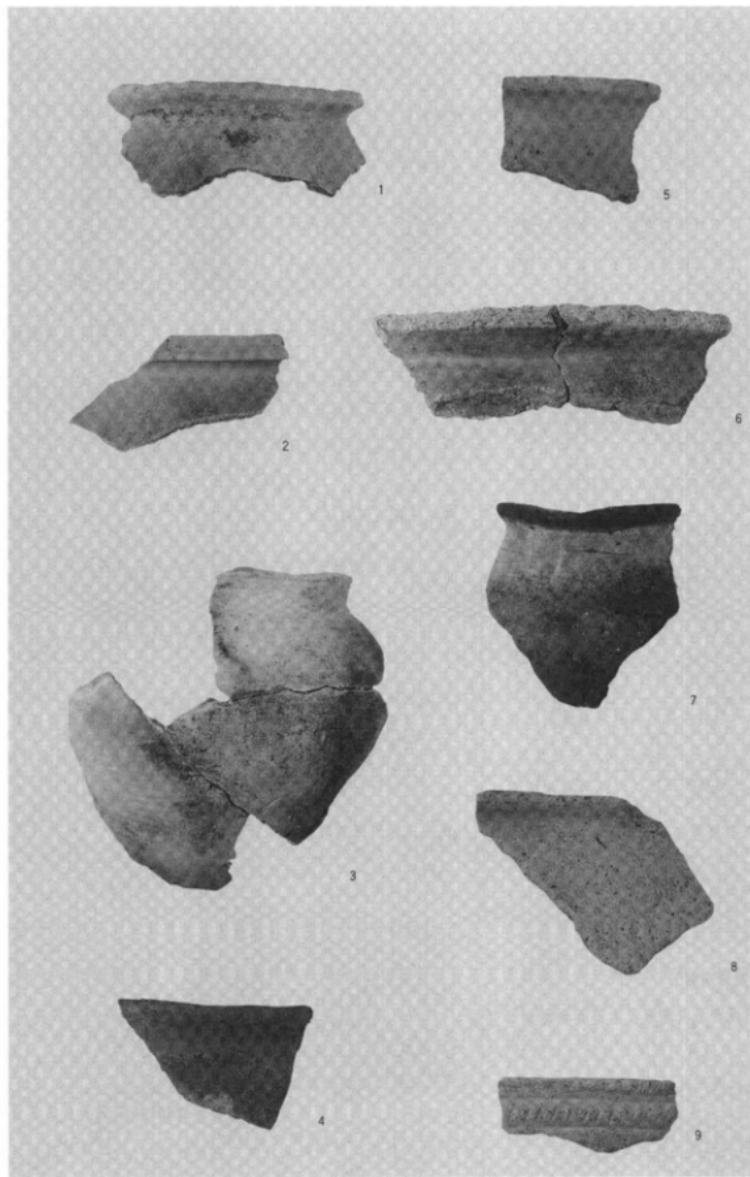
竪穴住居跡SB05(南東から)



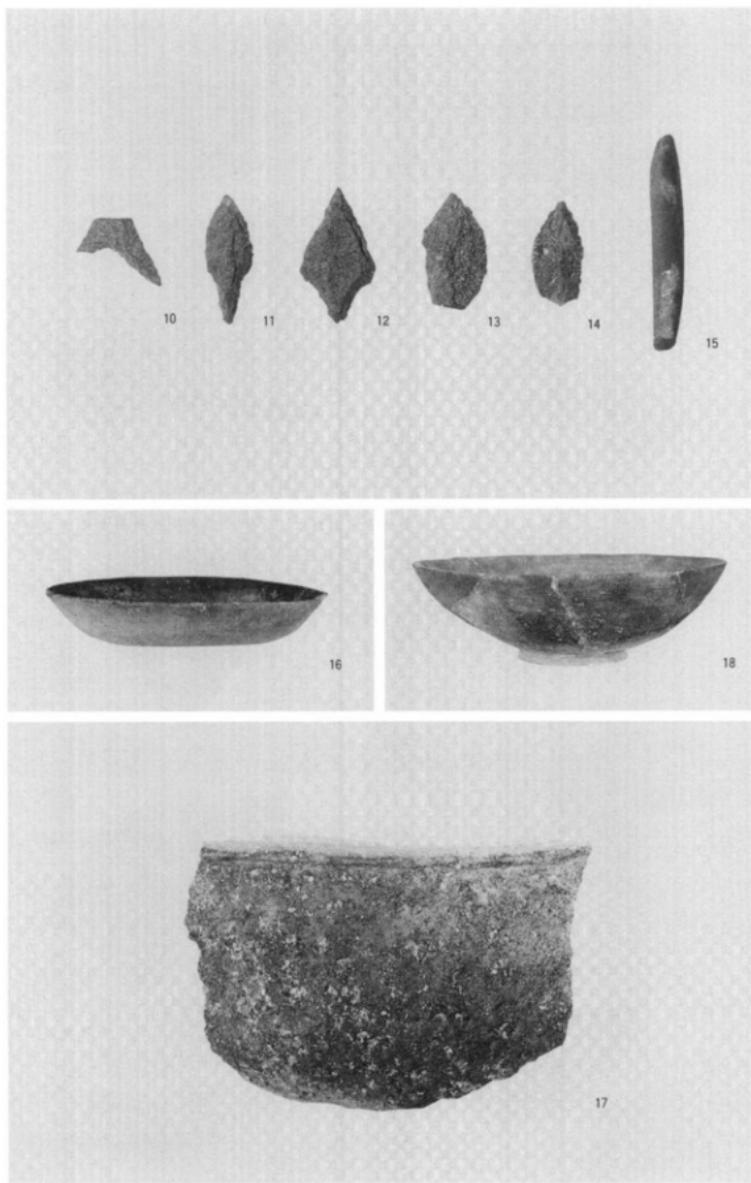
竪穴住居跡SB05(東から)



溝 SD01・02 (南東から)



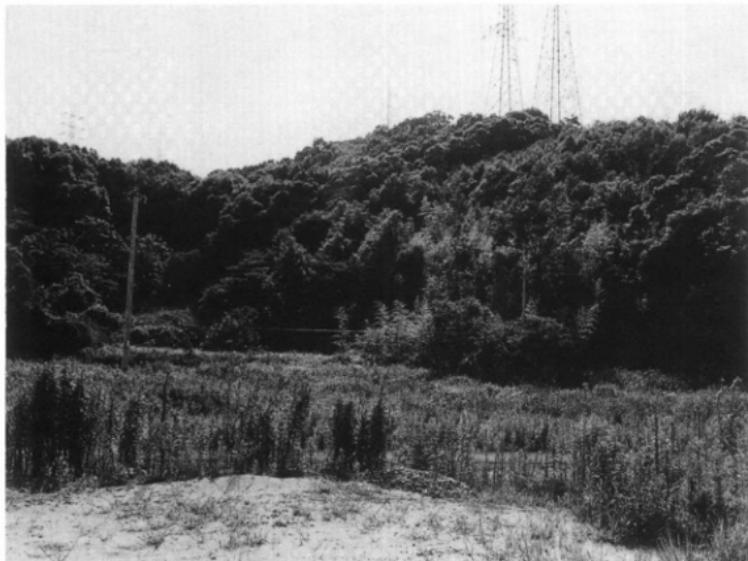
堅穴住居跡 SB05出土遺物



堅穴住居跡 SB05(10~15)、溝 SD01(16・17)、Pit13(18) 出土遺物

写 真 図 版

II 矢野の古墳（確認調査）



古墳遠景

(東から)



第1調査区 土層状況・天井石

(北から)



第2調査区 土層状況 (東から)



第2調査区 填埋 (東から)



第2調査区 不明石敷遺構 (西から)



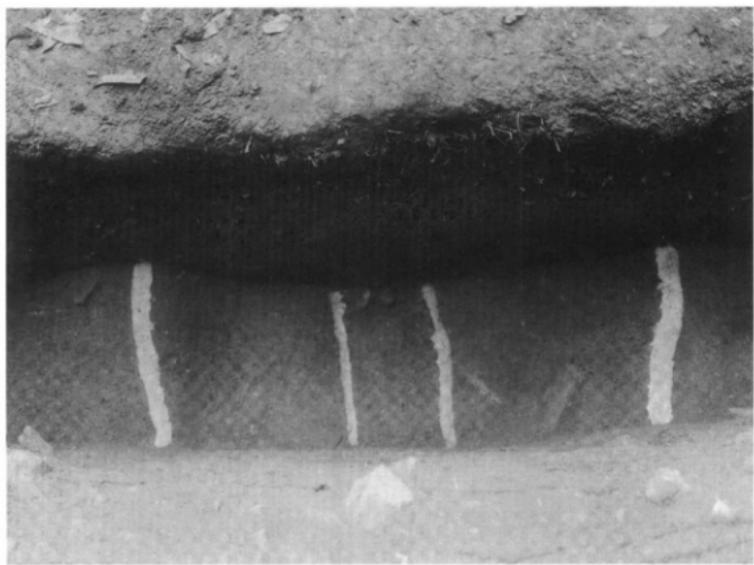
第3調査区 周溝 (東から)

図
版
4



第4調査区 土層状況

(北から)



第5調査区 周溝

(北から)

写 真 図 版

III 穴不動古墳（確認調査）



穴不動古墳全景

(南から)



穴不動古墳全景

(東から)



第1調査区

(北から)



第1調査区 北西壁土層状況

(東から)



第2調査区 (北西から)



第2調査区 北壁土層状況 (南から)

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要12

2002. 3. 31

発行 徳島市教育委員会

編集 徳島市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社教育出版センター